

老健 ほっかいどう

VOL.3

2018年1月

一般社団法人北海道老人保健施設協議会

特集

いよいよ始まる

2018年度診療報酬・

介護報酬同時改定

求められる老健のあり方とは!



北海道函館市
五稜郭

施設紹介 あかまつの里ななえ、ケンゆのかわ

トレンド 介護助手モデル事業

連載 より良い施設経営を導く「マネジメントの極意」情報編

医療・介護間の情報連携のあり方 ～地域をつなげるICFステージング～

一般社団法人 北海道老人保健施設協議会副会長
社会医療法人高橋病院 介護老人保健施設ゆとりる 理事長 **高橋 肇**



介護老人保健施設の目指す役割の一つに地域包括ケアシステムの構築が挙げられますが、英訳「Community based integrated care system」に示されるように、どうケアを統合するかが問われています。役割分担、機能分化とは、地域全体で安心と安全を提供することであり、地域がチームとなって初めて生活支援も含めた地域包括ケアシステムが成り立つものと考えています。

地域がチームとなるには、医療と介護の視点の違いや、双方の求める情報の相違をよく把握し、相手に求められているものを確実にわかりやすく伝える必要があります。医療側の得意とする視点は、内臓すなわち内側からの視点で、ICD的な発想と言えます。一方、介護側の得意とする視点はADLすなわち外側からの視点で、ICF的な発想と言えます。医療側は身体の中の病態像に着目し、本人の健康維持を重視しますが、介護側は日常生活の障害に着目し、本人の気持ちや生活の質を重視するとも言えます。

ICFの概念をどう医療側に理解してもらうかが今後の課題であると同時に、“つなぐ”ADL情報のスケールの標準化、統一化が望まれます。

全老健が創り上げたR4システムのICFステージング(A3

アセスメント)は、この問題を解決できる数少ないツールであり、急性期病院はもちろん、在宅においても本人・家族が評価可能な簡易的なものとなっているため、地域においても共通言語に十分なりうるツールとなっています。

利用者が医療機関・介護施設・在宅など居場所を変える中、その人を追っていく共通シートが必須であり、老健施設内の枠を超えたICFステージングの普及・活用が地域に望まれます。医療・介護を併せ持った老健施設が中心となってその啓発活動を行うことにより、地域をつなぐことが可能となるのではないのでしょうか。

生活の質(Quality of Life:QOL)向上と同時に、地域の質(Quality of Community:QOC)を上げなければ、いい医療・介護を在宅に届けることは難しく、そのためには老健施設が率先して高齢者の変化を地域全体で把握し、見守ることが必要になると考えられます。

今後、診療情報、介護情報、生活支援情報など多岐にわたるデータが“地域連携”の名のもとに集まってくる中、多職種間に亘る情報共有の支援者として“ICFステージング”を地域の中にどう浸透させ活用させるか、老健施設は今後も重要な役割を担っていくものと考えています。

Information

17年度はケアの質向上と会員同志の交流を深める研修が多く行われました。たくさんの方にご参加いただき、ありがとうございました。



●7月3・4日に旭川で行われた「平成29年度職員研修会」では、北海道医療大学リハビリテーション科学部理学療法学科教授の鈴木英樹先生が、「チームで取り組む転倒・骨折予防」について講演。転倒理由を分析することで予防の対策が講じられると解説するとともに、転倒に関わるバランス能力把握テストを参加者に実践してもらい、会場は盛り上がりを見せました



●10月14日には札幌で「2018年医療・介護同時改定特別講演会」を開催。シンポジウムでは、全国老人保健施設協会東憲太郎会長と谷内好副会長ほか、厚生労働省老健局老人保健課鈴木健彦課長が登壇しました。東会長は、「ICFステージングやR4システムも活用し、自立支援の旗手たる老健として頑張ってください」とエールを送りました



●11月10・11日、札幌市内で「第25回北海道老人保健施設大会」が開催されました。特別講演にはNPO町田市つながりの開の前田隆行理事長が、スタッフである認知症当事者とともに登壇。認知症になっても、社会とつながることで存在意義を見出し、生き生きとした日々を送ることができるとユーモアたっぷりに語りました